

駒ヶ根市文化財

名称	光前寺の両界曼荼羅図
種別	美術工芸品(絵画)
指定	市・有形文化財(平成 28・1・20)
所在地	赤穂 29
所有者	光前寺
説明	<p>絹本着色 15世紀</p> <p>“マンドラ”は古代インドの言語である梵語の単語で、経文では意識して「輪円具足」としている。完全を具現する、己よりいでて己に返る、要するに円くて何一つ欠けたところがないもの、という意味である。インドで生まれた密教が尊ぶ仏や菩薩などを幾何学的に図形上に配置して密教の宇宙観を表現していることで、図像はきわめて対称性が強い。曼荼羅にはいろいろな種類があるが、表現の世界を表す金剛界、内在の世界を表す胎蔵界、この二つを併せて両界曼荼羅といい、すべてのものの真理は、この二つの界にあり、と示している。</p> <p>胎蔵界曼荼羅</p> <p>胎蔵界は、胎児の母体にある如くであるから、この名がある。同様の理由で因曼荼羅とも呼ばれる。大日経がそれを説くのである。金剛界は開顕せられた仏智の境界を示すもので、堅固で破砕せられざる意、智が堅固で何物にも抜粋されない事を示すものである。金剛頂経がこれを説くのである。</p> <p>光前寺には、胎蔵界・金剛界の両界曼荼羅が所蔵されている。この曼荼羅は、絹布本五鋪(ほ)で着色。二幅各縦 2.31m、幅 1.58m。線は極く細い鉄線描きであり、肉線も墨線で、ところによっては朱線で描かれたところもみえる。岩絵具にも胡粉を混ぜて使っている。おだやかな美しさは絵の古風が窺われ平安期を思わせるところもあるが、金の用法、朱のぼかし方などから鎌倉期の作と推定されている。</p> <p>金剛界曼荼羅</p>

